日本ロシア文学会　関西中部支部　会報

発行　日本ロシア文学会関西中部支部事務局
住所　〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1　神戸市外国語大学　藤原潤子研究室
電話　078-794-8237　　Email　junko@inst.kobe-cufs.ac.jp

研究発表会・総会の報告

2025 年 6 月 21 日（土）に関西中部支部の研究発表会・総会が、中京大学及びオンラインで開催されました。

研究発表会

今回は 3 件の研究発表がありました。発表者と題目は以下の通りです。会報の後半に報告要旨を掲載しています。

（1）山本悠介氏（神戸市外国語大学大学院生）
題目：リムスキー＝コルサコフの異教史像：「三部作」における自然との距離感から
司会：北見諭氏（神戸市外国語大学）

（2）テン・ヴェニアミン氏（京都産業大学）
題目：G.ポメランツのドストエフスキー解釈：バフチンの「ポリフォニー」、「カーニヴァル」概念との比較を通じて
司会：木寺律子氏（京都産業大学）

（3）髙田映介氏（神戸大学）
題目：チェーホフ『三年』における風景画の役割について
司会：齋須直人氏（名古屋外国語大学）

支部総会

1）会員の異動

◇入会者
浅野智夫氏（大阪大学大学院。2024 年 9 月新規入会）
斎藤慶子氏（愛知県立大学。2025 年 4 月に関東東北支部から関西中部支部へ）
髙橋正信氏（旧中部支部会友から関西中部支部会友に）
佃菜通子氏（ピアノ教師。2024 年 9 月新規入会）
松山勝哉氏（神戸市外国語大学大学院。2024 年 9 月、会友から正会員に）
山崎タチアナ氏（旧中部支部会友から関西中部支部会友に）
山本悠介氏（神戸市外国語大学大学院。2025 年 5 月に会友として入会。推薦者：北見諭・藤原潤子）
渡部直也氏（大阪大学。2025 年 3 月に関東東北支部より関西中部支部へ）

◇退会者
清水俊行氏（2025 年 3 月に関西中部から異動）
法橋一彦氏（2024 年 9 月ご逝去）
藤本和貴夫氏（2025 年 4 月ご逝去）

2）関西中部支部新支部長ならびに理事候補の選挙結果

5 月に行われました次期役員選挙の結果は以下の通りです：

有権者数：131 名
投票者数：62 名（投票率　47.3%）
投票総数：372 票（うち有効投票数　348 票　白票数　24 票）

1 位　齋須直人氏　21 票
2 位　本田晃子氏　20 票
3 位　北井聡子氏　18 票
3 位　髙田映介氏　18 票（同点）
5 位　木寺律子氏　17 票
6 位　高橋健一郎氏　16 票
6 位　中野幸男氏　16 票（同点）
以下省略

以上の結果と総会での審議・承認の結果、次期運

営委員会メンバーは以下のように決定しました：齋須直人氏（支部長）、本田晃子氏（支部長職務代行）、北井聡子氏、髙田映介氏、木寺律子氏（事務局長）、中野幸男氏。上記役員 6 名を関西中部支部より日本ロシア文学会に理事候補として推薦します。

３）2024～25 年度決算

2024～25 年度（2024 年 4 月～25 年 3 月）の決算報告が承認されました。

収入

費目	予算	決算
繰越金	1552130	1552130
会費	0	0
利子	5	181
その他	0	0
合計	1552135	1552311

支出

費目	予算	決算
通信費	5,000	2505
総会運営費	10,000	3596
文具費	2,000	0
交通費	0	0
その他	1,000	0
時期への繰越金	1,534,135	1546210
合計	1,552,135	1552311

４）2025～26 年度予算

2025～26 年度（2025 年 4 月～2026 年 3 月）の予算案が承認されました。

収入

費目	予算	備考
繰越金	1546210	
会費	0	
利子	181	
合計	1546391	

支出

費目	予算	備考
通信費	5000	
総会運営費	10000	
文具費	2000	
交通費	0	
その他	0	
時期への繰越金	1529391	
合計	1546391	

５）次期監事

岡本崇男氏と北見諭氏に決定しました。

６）「日本ロシア文学会関西中部支部 会則」の改正について（審議・承認）

支部規定・内規の改正手続きを明記しました。

７）「日本ロシア文学会関西中部支部役員選任規定」の改正について（審議・承認）

被選挙権者の条件として選挙権者であることを追記しました。

８）「日本ロシア文学会関西中部支部役員選任規定」における役員免除の条件について（継続審議）

本部役員から支部役員の辞退希望が出されることがあるため、現状支部役員・委員に限定されている免除枠の拡大について審議しました。肯定・否定双方のご意見がありましたので継続審議となりました。

９）会費、入会費について

支部会費及び入会費を、引き続き当面無料とします。

10）次期当番校

来年度の研究発表会・総会の当番校は京都産業大学に決まりました。

◆◆ご意見募集◆◆

総会審議事項（８）の通り、「日本ロシア文学会関西中部支部役員選任規定」における役員免除枠について引き続きご意見を募集します。ご意見のある方は事務局までお寄せ下さい。

研究発表会報告要旨

リムスキー＝コルサコフの異教史像
「三部作」における自然との距離感から

山本悠介（神戸市外国語大学大学院生）

発表者は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活動した作曲家 N・A・リムスキー＝コルサコフ（1844-1908）の異教観について研究してきた。この発表では、後述する「三部作」の分析を通して明らかになった、彼の異教史像の一面について述べる。

そもそも、リムスキー＝コルサコフの思想、世界観を研究する上で、異教の持つ意味は大きい。彼はフォークロアを題材とするオペラを数多く制作したが、その動機に異教への強い関心があったこと、彼自身がある種の汎神論者であったことは、自伝『我が音楽人生の年代記』やヤストレプツェフの回想の中に記されている通りである。

哲学者 I・I・ラプシーン（1870-1952）は、1910 年の論文 «Философские мотивы в его творчестве»のなかで、リムスキー＝コルサコフの 3 つのオペラ『雪娘』（1881）、『サトコ』（1896）、『見えざる街キーテジと乙女フェヴローニヤの物語』（1904）について、「一種の三部作を構成しているということができ、これらにおいては、プロットの相違にもかかわらず、自然、人間的な天才、人類のための道徳的自己犠牲という形で、深い内的な統一性が見られる。」と述べた。我々の研究はこのアイデアを出発点としている。ラプシーンは主にリムスキー＝コルサコフの哲学的な問題に着目したが、この「三部作」というアイデアは、その時系列に着目するとき、ロシアの異教史を辿ったものとして捉えることもできる。すなわち、『雪娘』はキリスト教伝来以前の古代の世界を、『サトコ』は異教からキリスト教への転換の時代を、『キーテジ』は二重信仰の時代をそれぞれ舞台としており、そこにある種の歴史的な連続性が見出されるのである。

「三部作」には、石のモチーフで表される、人間の、現実的な生活空間＝都市と、水のモチーフで表される、スチヒーヤに満ちた神秘的な場としての海や森といった自然という 2 つの連続的な領域という共通した構造が見られる。物語の登場人物は、その中の何らかの地点に帰属し、その接触が物語を動かす。それ自体は特別なことではないかもしれない。しかし「三部作」ではまさにこの領域の関係性や異なる領域の存在同士の距離感の変化が、異教が失われていくプロセスに同期して描かれており、それが作品の表現の細部にまで徹底されているのである。

その好例として、我々は①「芸術家」と「神話的キャラクター」の関係、②自然の代表者としての動物の描写に特に注目した。

自然に対して例外的に深く接触する能力を持った人間としての「芸術家」がリムスキー＝コルサコフのオペラに多く登場することはラプシーンもすでに指摘しているが、三部作のうち『雪娘』と『サトコ』においてはこの「芸術家」と、究極的に自然の側に属し、特殊な力を持つキャラクター、いわば神話的キャラクターの恋愛がプロットの重要な要素となっている。そして『雪娘』における雪娘とレーリの関係性と『サトコ』におけるヴォルホヴァとサトコの関係性の対比に、世界観の変化の反映を見ることができる。

自然の代表者として登場する動物の描写にも連続的な変化が見出される。『雪娘』においては鳥たちは（動物昔話のように）人語で合唱するが、しかし『サトコ』では距離は遠ざかり、白鳥たちが人の言葉を出すには人の姿に変身しなければならず、それを聞くことができるのは、サトコのような「芸術家」だけだ。さらに『キーテジ』では、動物たちは都市の中で客体化されており、自然の神秘的な側面は、もはや直接の経験というよりも

物語の中のものとして継承されるのみである。

このように、「三部作」は異教が失われるにつれ、自然やそこに宿る力、神秘的なものが人間にとって疎遠なものになっていくことを描いていると言える。しかし同時に、『キーテジ』の結末は、異教の完全な消滅を描くものではなかった。むしろ反対に、フェヴローニヤという「芸術家」・「神話的キャラクター」の要素を併せ持ち、また正教と異教の要素を併せ持つ、極めて総合的なキャラクターによって、人間と自然と距離が決定的に回復される形で「三部作」は幕を下ろすのである。そこにはリムスキー＝コルサコフの異教観の中のある種の理想が反映されていると見るべきだろう。

G.ポメランツのドストエフスキー解釈：バフチンの「ポリフォニー」、「カーニヴァル」概念との比較を通じて

テン・ヴェニアミン（京都産業大学）

申請者はソ連／ロシアの思想家グリゴリー・ポメランツ（1918-2013）のドストエフスキー解釈を分析し、ドスエフスキー論に一線を画したミハイル・バフチン（1895-1975）の「ポリフォニー」と「カーニヴァル」概念との比較を通して、ポメランツのドストエフスキー論を新たに位置付けることを目指す。

まず、日本であまり知られてないグリゴリー・ポメランツの生い立ちについてごく簡単に紹介する。94 歳のその生涯をみることによって、ソ連の建国初期や独ソ戦、大粛清、雪解け時代、停滞時代、ペレストロイカ、ソ連崩壊及びロシア連邦の誕生などの画期的変遷を含む波瀾万丈なものだったといえる。

次にポメランツとバフチンとの関係について簡潔に触れておきたい。注目すべきはポメランツが晩年のバフチンと三度にわたり直接対談を行っていた事実である。この対談に関する言及はポメランツの 1975 年のエッセイ「ドストエフスキーにおける「二重思考」」（««Двойные мысли» у Достоевского»）に記録されている。

ポメランツのドストエフスキー論のエッセンスは 1990 年の『無底への開放性　トストエフスキーとの出会い』（«Открытость бездне. Встречи с Достоевским»）に結晶されていると考えている。まず、ドストエフスキーの小説を捉える核心的な概念は〈無底〉（бездна）として取り上げる。ポメランツによれば、〈無底〉とは形而上学的な恐怖心である。言い換えれば、〈無底〉は無限に対する恐怖と死に対する恐怖である。ドストエフスキーは小説において人間の理性では答えられない多数の「開かれた問題」（открытые вопросы）を提起し、その「開かれた問題」は〈無底〉へ導くのである。それは単なる静的な到着点ではなく、〈無底〉への運動には三つの段階があるのである。

次に、ドストエフスキー論の重要な概念は「主人公たち＝思想家たちとしての思考」（мышление характерами мыслителей）である。この概念はバフチンのポリフォニー論と密接に関わっていると申請者は考える。すなわち、多数の登場人物が様々な声をもって自由に発言をするが、それは一つの小説世界に統合されているという意味である。バフチンは問題設定として「作者と主人公」（автор и характеры）として捉えるため、「主人公の思考」（мышление характерами）という段階に止まっているといえる。それと違って、ポメランツはポリフォニー論を意識しながらも、ドストエフスキー小説における主人公はただの主人公ではなく、「主人公＝思想家」という独自な解釈を展開する。具体的に、「告白」（исповедь）という切り口からポメランツの「主人公たち＝思想家たちとしての思考」を分析

する。

最後にドストエフスキー論における一つの重要概念として、「愚者」(юродство)の分析を試みる。ポメランツのいう「愚者」は、バフチンのカーニヴァル理論における一要素としての「愚者」とは根本的に異なるものであり、彼はそれがカーニヴァル文学のジャンルに完全に収まりきらないと指摘している。

創作理念としての「生」:
チェーホフ『三年』における風景画の役割について

髙田映介（神戸大学）

中編小説『三年』（1895）は、チェーホフの作品の中でも比較的長編に属する。本作に関するメモは『手帳』Ｉの前半において約 200 項目にも及び、一作品への書きつけとしては最多である。興味深い点として、その多くが登場人物の性格や関係性に関するものであり、事件や出来事に関する記述が少ないという特徴がある。さらに、『手帳』の内容が取捨選択され、メモ書きから作品へと昇華されていく過程からは、チェーホフが物語の起伏を意図的に削ぎ落としていったことが窺える。

本発表では、『三年』のなかでも特に、ヒロインのユーリヤが絵画展で一枚の風景画に見入るうちに、まるで絵のなかに入り込んだかのような体験をするエピソードに注目する。本作には明確な事件が乏しく、物語の展開も抑制されているが、だからこそ、絵画の鑑賞を契機としてユーリヤが家庭内における自らの孤独を自覚し、精神的な自立の意識へとつながるこのエピソードは、人物像の形成や物語の進展において重要な意味を持つ。従来の研究では、この場面の絵画がどの作品をモデルとしていたかを同定する点に関心が集中してきた。本発表はこれと異なり、静寂と平和の感覚によって特徴づけられるこの風景画に対してユーリヤが抱く印象を描写するチェーホフの筆致に注目し、彼女の知覚のあり方や感覚の変化を分析する。ユーリヤが絵画に「没入」するという経験がなぜ彼女の覚醒の契機となり、どのように彼女の内面の変化を導いたのかを、当時の「移動派 Передвижники」の絵画運動の潮流も視野に入れながら検討することが発表の第一の目的となる。

第二の目的は、作中の絵が人物画や風俗画ではなく、風景画である点に存している。すでに述べたように『三年』は素材となった手帳の書きつけが最も多い作品で、同時期に書かれた書きつけの中には異色のルポルタージュである『サハリン島』がふくまれる。囚人の島サハリンの、チェーホフによる独自の調査は、その労力の大きさに比した場合に文学的作品として結実した例は多くないと一般に考えられている。しかしながら、チェーホフがサハリンで接した風土や自然は、のちの創作における自然観にも影響を与えているはずであろう。本発表では、『三年』の風景画に見られる自然の描かれ方やあり方を検討することによって、その影響の一端を明らかにしたい。